

7月18日 第297回 美術は平和とどのようにつながっているのか

画家 上野芙美さん（15人）

最初に夫で画家の故上野たかしさんについて話をされました。

東ドイツの展覧会に出品した作品「トビとリンゴで調教される象」は、ピカソなど著名な画家の作品と共に、雑誌「サーカスビルダー」に掲載されました。東山動物園の「象列車記念碑」の原画は全国の子どもたちから寄せられた一人ひとりの作品を生かして制作されたそうです。また「公募展には出さない」を貫いた、たかしさんの絵画への姿勢とそれを支えた人などについて話される芙美さんの表情は誇らしげで生き生きとしていました。

続けて小林多喜二を描いた大槻健司、戦前の前衛展、戦後日本のリアリズムや日本アンデパンダン展、柳瀬正夢、ケーテ・コルヴィッツ、いわさきちひろ等について幅広く、縦横に語られました。

会場にぐると並べられた絵画は、芙美さんの作品です。これは芙美さんが自分の戦争体験を伝えたいと思い作られた紙芝居「ハマユウの咲くころ」です。最後にこれを芙美さんに読んでいただき鑑賞しました。話も絵もとても心に沁みる素晴らしい紙芝居でした。

その後、参加者で意見交換をしました。

最初、話題は戦前・戦中の画家について集中しました。参加者の一人である前県美術館長からは「藤田嗣治がそうであったように、多く紹介されている作品が戦争翼賛の作品であっても、実は同じ画家が庶民の苦しい生活もたくさん描いている。今そういった作品の発掘が地方の美術館によってはじめられている。」「戦時中描かせた天皇や乃木将軍などのよく知られている美談や伝承場面の絵は戦後ほとんど隠されていたが、最近出されるようになってきた。この動きを注視したほうがいい」などの指摘がありました。また、平和美術展出品者の一人は「作品作りで大切なのはオリジナリティと良き師を持つこと」という、こばやしひろしの言葉に触れ、今年の自身の書作品テーマは『壁』であると紹介しました。

大垣で生まれ、和歌山県で活躍したが岐阜県ではほとんど知られていない村井正誠についてや、北川民治などの作品を収蔵した神谷美術館、信州のちひろ美術館、無言館などについても参加者が意見を交換しました。

その他、ポスターなどにおける平和表現の難しさ、群馬県議会での朝鮮人の碑撤去の動き、個展・グループ展と美術館、美術館を動かす運動の大切さなど話題は多岐にわたりました。

参加者が住む地域の市平和美術展の紹介もありました。

8月15日（第3週火曜日）のサロンは「ぎふ平和美術展を見に行こう」です。

*ぎふ平和美術展：岐阜県美術館 15日（火）～20日（日）午前10時～午後6時
（最終日午後4時まで）